心映の景色

人の心と手によって磨かれてきた「おもてなし」の空間がある

人は日常では得難い場面で感動を覚えます。それは初めて出会う景色であったり、さりげない優しさであったり…。それらの多くは人の手や想いによって訪れる人への配慮が幾重にも施されています。その根底に「おもてなしの心」が宿っているのです。

1 2 およそ40本ものもみじが彩る庭園、石段や池に落ち葉がこぼれる光景は、この時期ならではの風情。紅葉に色づいた錦の波と深緑のコントラストはまさに絶景。3 屋内からゆっくりと流れる時間を、色と音と肌で満喫。4 しっとりと落ち着いた雰囲気を醸し出す杉ゴケや地ゴケ、敷き詰められた緑が侘び寂びの幽玄な空間を静かに演出します。

↑植栽や池、敷石など、細部まで綿密な計算のもとに配置されている無造窯の庭園。そこには時代背景や思想なども反映され、訪れる人は空間と対話するように、やすらぎのひとときを実感します。

積み重なる想いから生まれる〝おもてなし〟

そこは思わず、ため息をもらさずにはいられない空間でした。はるか昔、上野焼開祖・尊楷（そんかい）も居たと伝わる場所。向かいには皿山本窯の古窯跡、上段には福智中宮に続く参道、傍らには中世の城跡…紅葉に彩られた無造窯が由緒ある石垣の上に佇（たたず）んでいました。

「おもてなしの心」をキーワードに、観光のまちづくりを進めている福智町。そこで目指してゆくホスピタリティ（おもてなしの心）の醸成は、ただ相手が満足するだけでなく、その喜びが返ってくることで幸せを感じるという相互関係です。こうしたつながりは、観光という一面だけでなく、地域社会生活での基盤となるもの。わたしたち一人ひとりが「おもてなしの心」を持って行動することが、豊かな人間関係を築くと共に活力ある地域づくりを進めていく源となります。

このさりげない「おもてなしの心」が根付いているのが、藩主の器を作り続けた「御用窯」として名高い上野焼窯元。中でも風情ある庭園を背景に、卓越した技と誇りを受け継ぐ熊谷無造さんは「お客様に喜びを感じていただく配慮は、客商売を営む上で備えるべき当たり前の感覚。そのための準備や演出は、どんな場面でも手を抜かない」と力を込めます。気の遠くなるほどの年月と、そこにかけられた「想い」や「手」。それらが重なり形づくった見事な回遊式庭園は、花木にとどまらず陽光や風さえも「おもてなし」の仕草に感じられるのです。

無造窯
熊谷 無造さん

礼法の本流が息づく

室町時代から綿々と伝わる「小笠原源流礼法」。上野焼を創始した細川家にかわって小倉城に入城した小笠原家に受け継がれてきた礼法で、わが国では現存最古とも言われています。その総師範として全国で名を馳せる菊谷ミツヱさん（赤池）は、茶道でもその道を大成。国外でも日本古来の文化を広め、その重要性を説いてきました。

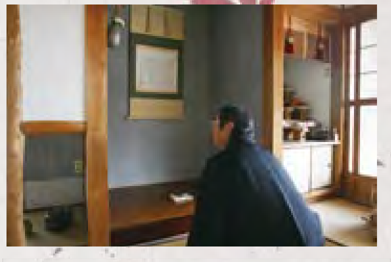
「受け継がれている礼法の根底は相手に対する『思いやりの心』です。相手を察し、気遣う心。その心を時と所と場にふさわしく、かつ美しく表現するのが最高の礼法」と説明する菊谷さん。「そこに会する人たちにとって、いかに最高の空間や舞台が演出できるか。あらゆることに心を配ります」と齢（よわい）86を迎えた今も美しい所作で客人をもてなします。

時代や形は変わっても、おもてなしでの「相手を大切に思う心」は決して変わらない。普遍であり不変の「心」が、この地に息づいていました。

小笠原流礼法 総師範
菊谷 ミツヱさん

礼法に習って茶室へ

↑席入の合図を待つ「待合」と呼ばれる控室で待機。庭のしつらえや季節の草木の様子から、その意匠を感じ取ります。飛び石や敷石がある場合は、石づたいに茶席へ向かいます。



↑入室したら、亭主が来る前に掛物や花入、お香や香合、茶道具などをじっくり拝見。名品であるほどその背景に物語が隠されています。そんな亭主との会話も楽しみの一つ。

↑座席の右側が上席になるため、茶碗の正面を右に避けてお茶をいただきます。1度ではなく何度かに分けて飲み、最後は「すっ」と残りを全て吸いきる気持ちで飲みきります。

※小笠原源流礼法に習って説明、主だった作法だけを紹介しています。